老年保健看護

報告者：田場由紀　山口初代

教育及び実践の課題

教育の課題は、自己の文化を意識して他者（高齢者）の文化を理解するための教育の工夫であった。現状では、高齢者の文化とケアとの関連について、老年保健看護Ⅰの講義で取り上げ、老年保健看護実習Ⅰの実習内容で高齢者との関わりから個人のもつ文化理解につなげる工夫（生活史とセルフケアの関連など）をしている。しかし、自己の文化を意識するためには、さまざまな異文化としての他者の文化に触れる体験が必要である。そのため、地域文化を生きている高齢者との関わりが多く体験できる教育環境の工夫が課題であった。

活用した論文の概要

多様な意味で用いられている文化的感受性という用語について、その意味を明らかにするための概念分析を目的とした研究である。

文化的感受性は、文化の多様性と自己と他者の文化の違いの認識、文化の違いを体験する出会いを前提とし、その特性は、知識、考慮、理解、尊重、調整であった。これらの文化的感受性によってもたらされる結果は、効果的なコミュニケーションと双方の満足があった。このことからFornda(2008)は、文化的感受性はケアに効果的であり、そのために必要なことは、自己の文化を意識して他者の文化を理解することであると結論づけていた。

教育及び実践への活用

自己の文化を意識し高齢者の文化理解を深め、高齢者ケアに生かすために、老年保健看護実習Ⅱ、および在宅保健看護実習では、地域文化に触れる実習施設の選定を行っている。

学生は、高齢者看護の実習を通して、高齢者の持つ地域文化の理解と高齢者ケアとの関係を学ぶ。たとえば、高齢者が主役となる伝統行事がリハビリ意欲につながっていること、入院の見舞客が同じ病室で知り合いの別の入院患者に出会い、会話が弾む場面を共有し、地域でのつながりの確認と関係者がケアに参加していること、入院中に不穏になっている高齢者が、同じ地元出身の入院患者の存在によって落ち着きを取り戻すことなどを体験し、高齢者の生活基盤となっている地域の文化が高齢者のニーズやソーシャルサポートに関連していることを学んでいる。これらの学習を学生自身の家族や親族と照らし合わせ、共感し、あるいは新たな価値を発見することで自己の文化を意識できる。今後の課題は、学生が意識した自己の文化を表出させ、それをリフレクションに生かしていくために、実習指導に反映させる手法を検討することである。

参考文献

Cynthia L. Fornda.. (2008). A Concept Analysis of Cultural Sensitivity: Journal of Transcultural Nursing 19(3):207-212.